告解

空野閑人

この作品はフィクションです。実在の人物・団体とは関係ありません。フィクションでしか色彩を得られないモノクロームなあなたへ。自分は物語の主人公のようにはなれないと気づいたのはいつですか。社会は美しくないと気づいたのはいつですか。それでも素敵だと思えたものはなんですか。ところでこの一節も、この作品とは関係ありません。

ニワトリが朝を告げる役割を果たさなくなってもういくつ経ったのだろう。白いハトが飛んだとて平和が訪れないように、象徴と実際には乖離があるし、理想は目標としてではなく絵空事として君臨している。そもそも朝というのは人によって様々であり、自転と公転から人間が切り刻んで編み出した１２進法および６０進法に従う者、起きてからしばらくを朝と規定する者もいる。「おはようございます」と「こんにちは」が混ざりあう風景がなくならない限り、世界共通の朝は来ない。

僕はぼくの朝を迎える。目覚ましは、いともたやすく突き抜ける軽自動車の走行音。職を取られた目覚まし時計に同情しながらスイッチを切り、テレビを点ける。世界の一大ニュースは寂寞をかき消すための喧騒になり果てる。課された義務のように灰色のカーテンを開けたけど、かわり映えしない曇天が広がっているだけだった。

それでいい。

この町でまだ何者にもなれていないような僕には丁度いいじゃないか。アスファルトとコンクリートでできた世界と空の色彩もない今日でなら、消え云ってしまえそうで。そう思っていたけれど、携帯の通知音がかろうじて現実につなぎとめた。

［おはよう！！！］

［今日の持ち物って筆記用具とパソコンと、あとなにかいる？？？］

送り主は、同じ大学に進学することになった高校の同級生の筝山やとせからだった。「？」を複数つける彼女らしい文面にどこかほほえましさを感じつつ、それくらいじゃないかな、と返信する。あれば水筒も持っていくことを勧めたあと、朝ご飯を食べることにした。

空きの多い冷蔵庫を見渡し、納豆をとり出す。まだ引越して日が経ってないし、朝から料理をする根性も余裕もない。寝ぼけながら撹拌された納豆と卵を湯気の上がる白米の上に落としただけの簡単な朝食。せっかくあるのだから、ネギを刻んで入れるくらいはしてもよかったかも。机にこぼさないように気を付けながら食べ進める。家具屋でテーブルを買わなかったのは失敗だったかもしれないと思ったのは、僕の勉強机は食事をするには手狭だったからだ。

歯磨きしながらながめる全国ニュースは地元にいた時と同じで、しかし分針が四分の三を過ぎてからは異郷感が身に染みる。そこからさらに十二分の一だけ分針が進むころには荷物の確認。時間がなさそうだからと水だけ張られた食器たちを横目に靴を履く。ウェットティッシュで簡単に汚れは落としたから許してほしいと心の中で謝罪。こちらを覗き込む、まだ解かれていない引っ越し荷物には見えないふりをして鍵をかけた。

雲同士の輪郭のぼやけた、のっぺりした花曇りの空の下を往く。足取りはどうにも浮遊感から抜け出せない。自分の意志で決めた進路のはずが、誰かに見させられている夢のような感じがする。いままで縁のなかった地に野を越え県を越えやってきて、さらには大学の門をも乗り越えて、教室に集まった大学生の一人として生きている。生きているらしい。

ひとは他者から認識されて初めて自己存在を確立できる。ただ誰かの視界に入り視覚情報の一つとして処理されるだけじゃ認識されてるとは言えない。人間の耳が聞きたい音だけ聞き取れる仕組みを持ち合わせているように、見ようと思われないうちは目に映らないのだ。そして現状、僕を僕として、空野閑人だとして認識している人物はいないだろう。友達と呼べるほどの間柄の人間がおらず、ふいと蒸発しても誰にも気づかれなさそうな存在の不確かさ。これが浮遊感の原因だとはわかっている。

だからこそ、数少ない私の観測者である箏山さんに依存していることも自覚はしている。

私の中にある、慕情とも仲間意識とも言えない名前のない感情の存在も自覚しているさ。

彼女との交流は高校時代。三年次の新入生歓迎会と中間テストの狭間、エアポケットの五月から始まる。美術部の作品を見て回ることが好きだった僕は、定期的な作品の入れ替わりがあるたびに、校内をぐるりと巡り鑑賞を楽しんでいた。部活勧誘のポスターの張られた昇降口付近、本のＰＯＰの貼られた図書館への階段の踊り場、大学のパンフレットが置かれた東校舎への渡り廊下。各所に掲示された珠玉の作品の数々。そして彼女の名前だけが見つからない。彼女は美術部員のはずなのに。思い返すと、今まで箏山さんの作品を見たことはなかった。彼女の作品はどこにあるんだろう？

校内をくまなく探索しても見つからなかったため、本人に聞いてみた。いままで特別話したことがなかったが、好奇心を満たしたい気持ちが勝った。もとより創作をする人には興味があったのだ。

聞き出した場所に掛けられた絵は他の部員も書いていたデッサンとおんなじ構図で、彼女独自のデザインのものではなかった。僕は”箏山さんらしさ”を見たかったのに。しかしそれでも彼女の技量の高さはうかがい知れ、ますます彼女を知りたくなった。

いつから絵を描いているの？

他に描いたことのある絵はあるの？
描いているときはどんなことを考えているの？

しかしこれといった接点もなく、席も近くなったことはない。当然話したこともろくすっぽない。僕と彼女との間にある共通項は同級生であること、それくらいだった。

いや。本当は昔に二度あった。二度話したことを僕は覚えている。僕だけは。一度目は、修学旅行の集合写真の仕分けを手伝っているところに出くわしたとき、二度目は先生と歌について話しているとき。どちらも二分にも満たない刹那の会話。海に凪がれれば崩落する砂の城のような記憶。それでも思い返せば、そのころからある種特別視していた。

今更になって連絡先を交換したのは、作品の展示場所を聞くためだった。会話の目的を達成した今、話を広げようとするのも不自然に思われるかもしれないと感じてしまう。［また美術室おいでよ！］という言葉だけを、再び交流を図ろうとする免罪符として手に入れておきながら、一歩も踏み出せない日々を過ごした。

意外にも、そう時間が空くことなく筝山さんとの交流の機会は再び訪れた。国語の授業で、文中の比喩表現の解読や心情考察を班活動で行うことになったことを利用した。あいにく班は同じではなかったが、そこで諦める僕じゃなかった。

僕は国語が得意だから、と他の班を手伝うことにしたのだ。「他の人がどのような解釈をするのかに興味があったから、よそに首を突っ込むことにしたんだ」……というのは半分建前で、筝山さんと会話するきっかけにできないかという画策も含まれていた。

首尾よく筝山さんと協力関係を結び、話の流れで美術室にお邪魔して、二人でアイデアを出し合うことになった。画材の、油っぽい香りのする空間。生徒のデッサン材料にさせるべく置いてあるのであろう謎の骨格標本、立体、唐竹割された貝殻。水で薄まり切らなかった色素の沈着した洗い場には、誰のものともわからない筆が散らかっている。

図工室によくある背もたれのない四つ足の椅子に腰かけて、始まる教科書とのにらめっこ。椅子一つ分の距離の先にある彼女の横顔。

ピアノやクラシック音楽が好きなこと。ディズニーが好きなこと。クラスのにぎやかな男子が少し苦手で、最近は他所でお昼を食べてくれているから静かになってうれしく思っていること。言葉を交わすうちに彼女の人間像がゆっくりゆっくりわかってきて、うすうす感じていたことの正体もだんだんとわかってきた。

多分、彼女と僕の趣味興味の範疇は重なり合わない。

なんでいままで交流がなかったのか、その根源はきっとこれだったんだ。

興味も関心が合わないのなら、きっと交流を続けてもひずみがたまっていくだけだ。離れたほうがいい。そう思うのに、彼女の残る教室から出るときの、後ろ髪を引かれる感覚が消えない。１０分間の休み時間に、彼女が４つ横のロッカーで教科書を出し入れしているときに葛藤する心。話しかけるべきか、話かけざるべきか。毒にも薬にもならない話題なんかで彼女の時間を奪ってもいいのだろうか？

親しくなりたいけれど、近づいちゃいけない。せめてすれ違う時に「おはよう」と「じゃあね」を言える間柄になっただけで満足するべきなんだ。これ以上、高望みするべきではない。そう言い聞かせて感情をクシャクシャに丸め、ゴミ箱にポイしようと、していたのに。

［美術部室来たっていいんだよ？話そうよ］と言われたり、ふたりだけで遅くまで発表の準備をしたり。僕が部活ストレスでストライキしたとき、偶然ではあったものの長話に付き合ってくれて、くだらないことでたくさん笑ってくれた。

部活に復帰できたのは膝を抱えて笑ってくれたあのときのあなたのおかげなんだよと伝えられたら。

むかし聞かせてくれたあなたの歌声がどれほど素敵だったかを伝えられたら。

誕生日に下駄箱に入れたバースデーカードの差出人が僕だと伝えられたら。

閑人くんしずひとくんって、僕を呼ぶときの言い方が好きってこと。

すごく文字がきれいで、自習の時もマジメに取り組んでいることも知ってる。

でもたまにこっくりこくりと頭が揺れているのも見ていたり。

通学の電車が同じらしい男子と話しているのを見るたびに嫉妬していたこともある。

蓄積していく伝えられない想いの群れ。彼女の笑顔が焼きついたままの記憶フィルム。きっとどうせ恐らく僕たちは引き合わないのに。僕がＳ極だとすればあなたはＳでもＮでもない極だ。くっつくくっつかない以前に”組み合わせとして成り立たない”。関係性が生まれない。いっそ筝山極と引き合う極が現れるか、もしくは遠く離れた那由多の彼方まで行ってしまえばよかったのに。成層圏も抜け出して、空にまたたく星座の一つになってしまえばいいのに。あくまでもショーケース越しでしかない、純然たる憧憬だけ抱けたらよかったのに。どうしてあなたは遠ざかってくれないのだろう。

こうしてあなたに理由を押し付けようとする自分もまたげんなりするほどに醜悪だと思った。

同じ大学に進学してからは、また話すことが増えてしまった。

［履修登録ってどうすればいいの？？？］

［この制度って結局何なの？？？］

［教科書ってどこ見れば何必要かわかるの？？？］

どんな質問が来てもいいように、手元のリーフレットを熟読する。半分は自分のために、半分は筝山さんに教えるために。僕が学校の教室確認をするときは彼女の選んだ授業の場所もついでに確認したし、お知らせが来たら念のため彼女にも伝える。彼女のために知識をつけ、彼女のために質問をする。時代が時代なら、僕は彼女の毒見役だってよろこんで引き受けていただろう。

こうして尽くすのは、きっと僕なりの生存戦略なんだ。なにもあなただけにそうしてきたわけじゃない。自己肯定感が自分で生み出せないから、他人に価値を見出してもらうしかない。善人になれば相手から切り捨てられることはないはずだ。相手にとって害はなく利を与える存在なのだから。

だけどあなたに対してはなんだか、それ以上の意図があるように、自分で自分を疑っている。

「閑人くんと話すと安心感あるんだよね。困ったら閑人くんに聞けばなんとかなるやーって思っちゃってる、ふふ。っていうか、頼りすぎだよね、ごめんねー」

そんなことないよ、人の役に立つのは好きなんだ、という返事に嘘はない。それも本心だからだ。また別の本心を隠しているだけで。生まれつつある独占欲のような感情を隠しているだけで。

僕だけを頼ってほしい。アパートの隣人が同じ学年の女の子とか言っていたっけ？きっといちばんに仲良くなるのはその子だろう。でも学部は違うらしいじゃないか。じゃあ、その子より僕と話してほしい。

幾万幾億の助言と肯定をあげるからこっちをみてよ。
きっと僕のほうが情報をたくさん知っているよ。
きっと僕のほうがあなたのことを知っているよ。
絶対に僕のほうが君のことを思っているよ――

この前だって寝るまで通話したじゃないか。あなたは見事に寝落ちしていたじゃないか。無防備にも寝つぶれていたようじゃないか。これだけ話して、これだけ――

これだけ――なんだっていうんだ？

「これだけ手助けした」？
「これだけなかよくなった」？

そんなものは独りよがりな思い込みじゃないか。なにを根拠に、なにを勝手に勘違いをしてるんだ？真に彼女の幸せを願う者なら、相手が誰か一人にだけ依存している状況を健康とは判断しないじゃないか。相手のことを思いやれもせずになにかを望む権利があるとでも？こんな考えを抱くようではもはやダメだ。

私は誰かを求めちゃいけない人間だ。

そもそも僕は彼女の何を知っているのだろうと思っても、相手の何を知っていれば恋に落ちてもよいとされるのかなんてわからなかったし、相手の何を知りえればその人間のことを「知っている」と言えるのかもわからなかった。ラブとライクの違いもわからない青二才には「好き」という権利なんてないのだとようやく気が付いた。

質問も相談もなくなり、会話のひとつも起こらないままかれこれ二か月が経つ。同じ街の同じ大学に通っているはずなのに、すれ違いもしないと本当に実在してるのかも怪しく思えてくる。存在証明となる、メッセージアプリの彼女欄には、かつて通話した時間が表示されたまま、寒々しく時が止まっている。手段があっても行使する気分にもなれず。携帯越しに話しかける勇気がないんじゃない。こちとら放送部上がりだぞ。突然話しかけることなんていまさら厭わない。

覚めないでいてほしかったはずの酩酊なのに、アルコールの分解が始まることをただ静観しているような――それは不思議と諦観ではなくむしろ日の出をぼんやりと眺めるような――そんな気分なんだ。

明けない夜を望んだ四時間後には夜明けを望むような奴だ私は。蝋燭を汗ばませる炎の揺らぎを快く思うと同時に、消えてしまった後に差し込む月光を心待ちにするような奴だ俺は。

初志貫徹を一度も成しえたことのない意志薄弱な浮気者には静寂と曇天がお似合いだ。

それでいい。

蛹のまま蝶になれずに死んでいった感情の残滓は、まだ僕の手元に残っている。どれも唾棄すべきものだ。自然乾燥で揮発させるよりも僕の手で終わらせようと決めたんだ。運命に翻弄されたといえば僕も被害者ヅラできるけど、事実は変わらない。”僕は勘違いをしたまま彼女に余計なことをした”。彼女にこんな内情が露見したらどんな顔をされるのだろう。相手の行為の裏側にこんな思惑があっただなんて知りたくもなかっただろう。きっと気味悪く思わせてしまうのだろうな。

これは濃縮し続けた毒を吐き出す身勝手極まる行為であり、罪人の自白書であり、袂別の手紙だ。

あなたは変わらず輝いていてください。輝き続けていてください。誰かの太陽であり続けてください。そしてできればばったり出会ったときに、もう一回恋に落ちそうな笑顔ではにかんでください。

せめてもの償いに、今度こそ純然たる協力者として私は生まれ変わろうと思う。

どうか私を忘れないでください。
どうか私を忘れてください。
腹を割って話さなきゃいけないときまで死ぬんじゃないぞ。
またね。